

研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-141	C-179	21-402	佐賀県医療センター好生館 角南隆史 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター 松下幸生
題名 (原題/訳)			
Clinician Suspicion of an Alcohol Problem: An Observational Study From the AAFP National Research Network アルコール問題に対する臨床医による予測：AAFP 全国研究ネットワークからの観察研究			
執筆者			
Vinson DC, Turner BJ, Manning BK, Galliher JM. Clinician suspicion of an alcohol problem: an observational study from the AAFP National Research Network.			
掲載誌			
Ann Fam Med. 2013;11(1):53-59. doi:10.1370/afm.1464			
キーワード			PMID
アルコール依存症、予防、有害な飲酒、飲酒行動、スクリーニング			23319506
<p>目的：臨床現場ではアルコール問題の検出は、多くの場合スクリーニングテストを使用するよりも、医師の印象診断によるところが大きい。</p> <p>われわれは、スクリーニングテストを用いてアルコール問題を検出することと比較して、医師によるアルコール問題の検出の感度、特異度、および的中率がどのくらいになるか、評価した。</p> <p>方法：われわれは、94のプライマリケア医のオフィスにおいて、横断調査を実施した。医師と患者の双方が面談した後、簡単なアンケートに各々が個別に記入してもらった。</p> <p>患者には、AUDIT-Cの3問に基づく危険な飲酒と、DSMに基づく有害な飲酒(乱用と依存)に関する2問の計5問を、匿名式の出口アンケートとして実施した。</p> <p>医師は「この患者はアルコールの問題を抱えていると思いますか?」という質問に「はい、危険な飲酒です」および「はい、アルコール乱用または依存です」などの付帯事項をつけて回答した。スクリーニングテストに対する患者の回答と、医師の回答との関連を分析し、評価した。</p> <p>結果：オフィスを訪れた2,518人の患者のうち、2,173人が組入基準を満たし、1,699人(78%)が終了アンケートに記入した。171人(10.1%)の患者が、危険な飲酒(AUDIT-Cが5以上)のスクリーニング検査が陽性であり、有害な飲酒が64人(3.8%)であった。</p> <p>医師は、81人の患者にアルコール問題を疑っていた(37人が危険な飲酒、40人が有害な飲酒、4人が両方を満たす)。</p> <p>危険または有害な飲酒に対する医師の印象診断の感度は27%で、特異度は98%であった。陽性的中率と陰性的中率は、それぞれ62%と92%であった。</p> <p>結論：アルコール問題の医師による印象診断は、感度が低いが、アルコール問題のスクリーニング検査が陽性であった患者を特定するための特異度は高かった。</p> <p>これらのデータは、アルコール問題に関して医師の印象診断を補完するために、スクリーニングテストを日常的に使用する必要があることを示している。</p>			